©日本記者クラブ 2021

日本記者クラブ会報

公益社団法人　日本記者クラブ　〒100－0011　東京都千代田区内幸町2－2－1　日本プレスセンタービル　TEL. 03－3503－2722　https://www.jnpc.or.jp/



高揚なき勝利

候補者の名前に当選確実の花を付ける自民党の岸田文雄総裁（左から3人目）と甘利明幹事長（当時　同2人目）、高市早苗政調会長（左端）=10月31日、東京都千代田区の党本部

撮影：西畑　志朗（朝日新聞社映像報道部）

10階ホール　横長の壇上に9人
31年間に18回目の党首討論会

思わぬ寒さに少し震えながら日本プレスセンタービル正面で待ち構えると、衆院選を戦う各党党首が次々、到着した。タクシーで乗り付けたり、正面を通らず控室に現れたりとちょっと意外な展開もあったが、10月18日午後1時5分、NHKの定時ニュースが終わるとともに、9党首討論会は始まった。

国政選挙前に主な政党の党首がそろって日本記者クラブで討論会に臨むのは1990年が最初だったと「日本記者クラブ　30年の歩み」（99年発行）にある。当時の自民、社会、公明、共産、民社の5党が公開討論会を開くことに合意し、公平かつ公正な運営のため当クラブに開催を依頼した。予定日4日前の正式申し入れに、クラブはてんやわんやになったろう。以降、党首討論会は18回を重ねる。

初回と同じ10階ホールにしつらえた横長の壇上に今回9人の党首が並んだ。聞くべきこと、聞きたいことを時間内にやりとりするため、記者会見方式はとらず、企画委員代表の4人が質問をぶつける。ひと月前に開かれた自民党総裁選の討論会と同じ顔触れが、あいまいにしか語られていないこと、どう実現するかが不明なことなどを突き詰める質問を練った。流れや時間配分も打ち合わせたが、実際には制限時間を超える回答が多く、時間は大幅に押した。時計をにらんで質問団は調整を続け、いくつかの質問を割愛し、10分ほどオーバーしてNHKの生中継に収まった。翌日の各紙朝刊は討論会の模様を大きく、細かく伝えた。

（専務理事　江木慎吾）



左から社会民主党の福島瑞穂党首、国民民主党の玉木雄一郎代表、日本共産党の志位和夫委員長、立憲民主党の枝野幸男代表、自由民主党の岸田文雄総裁、公明党の山口那津男代表、日本維新の会の松井一郎代表、れいわ新選組の山本太郎代表、「NHKと裁判してる党弁護士法72条違反で」の立花孝志党首

9党党首討論会

時間との闘いだった

佐藤　千矢子（毎日新聞社編集編成局総務）

衆院選公示日前日の10月18日、10階ホールで9党党首討論会が開催された。第1部は党首による主張と党首同士の討論、第2部は企画委員4人による代表質問と2部形式で行った。代表質問を担当した佐藤千矢子企画委員、第1部司会の伊藤雅之企画委員、オンラインで視聴した井上裕之企画委員に感想をよせてもらった。

米大統領選のテレビ討論会のように、テーマごとに何回かに分けて議論できたらいいのに―。衆院選の党首討論会で代表質問をさせていただいた率直な感想だ。

9党首を相手にするには時間が足りず、抽象的な答えしか得られなくても、追加質問いわゆる「更問い」をあきらめ、地方政策などテーマごと断念せざるを得なかった質問もあった。

討論会終盤の「ジェンダー・多様性」では、選択的夫婦別姓の導入とLGBT理解増進法案について「来年の通常国会への法案提出」に賛成の人に挙手を求め、自民党の岸田文雄総裁だけが両方とも手を挙げない結果になった。

複雑な政策に二択で答えを迫る手法には賛否両論あるだろう。

本来なら9人全員に丁寧に聞きたかったが、時間の制約の中で、多くの情報を提供する工夫だとご理解いただければと思う。

選択的夫婦別姓での挙手質問は、2019年参院選の討論会に続き2回目だ。たまたま今回の討論会当日の毎日新聞朝刊で、上智大教授の三浦まりさんが、参院選討論会の時の挙手質問を取り上げ、ジェンダー政策が端に追いやられてきたのが変化し「ジェンダー問題が争点になった象徴的な出来事」だったと指摘していた。

有権者の選択に資することを第一義に、挑戦的質問をし続けることの大切さを再確認させられた。

骨太の議論　土台作り必要

伊藤　雅之（NHK解説副委員長）

国会で十分な議論なしの「短期決戦」だけに、今回の党首討論会は、有権者に判断材料を提供できるかどうかが問われた。

第1部では、立民が選択的夫婦別姓をいきなり問い、自民は安全保障で野党連携をけん制した。互いに相手の弱点を突き、対立の構図は明確になった。

その後、第2部を含め経済政策や税制などをめぐり議論が続いたが、各党とも明確にできない部分は残ったままだった。

有権者が知りたいのは、まさにその部分だろう。

「なぜ実現できなかったのか」「どんな痛みが待っているのか」。有権者の諦めにも似た冷たい視線をはね返すには、せめてもう30分でも時間があればと思った。

衆院選はいつも「短期決戦」になりがちだ。聞きたいことは山ほどある。党首討論会だけでなく、普段から骨太の議論の土台となるような場を作っておく取り組みも必要だと痛感した。

来年の参院選に向けて、出席政党の基準は改めて議論すべきだろう。ただ、今回は結果的に妥当だったと思う。排除は、時として、「された側」より「した側」に大きな痛手を残すと考えるからだ。

根本清樹理事長のあいさつ



９党首の皆さん、当クラブの討論会にお集まりいただきありがとうございます。ほぼ４年ぶりの政権選択の機会となりました。コロナ対策をはじめ広範な政策課題について、あるいはそれぞれの政治姿勢について活発なご議論を交わしていただき、有権者の皆さんに豊富な判断材料を提供していただければと思っております。

第49回衆院選９党党首討論会　実施要領メモ

▼10月18日（月）13：00～15：10（公示10月19日）10階ホール▼登壇者：岸田文雄自由民主党総裁、枝野幸男立憲民主党代表、山口那津男公明党代表、志位和夫日本共産党委員長、松井一郎日本維新の会代表、玉木雄一郎国民民主党代表、山本太郎れいわ新選組代表、福島瑞穂社会民主党党首、立花孝志「NHKと裁判してる党弁護士法72条違反で」党首▼進行：【第１部】(60分)＝９党首が「一番訴えたいこと」をボードを用いながら主張（持ち時間30秒）。その後、党首同士の討論。相手を指名して質問、相手が回答（各１分）、質問者がさらにコメントする（30秒）形式で２巡行った。【第２部】(65分)＝企画委員会の代表が質問（回答時間は１分）。▼総合司会：小栗泉企画委員、第１部司会：伊藤雅之企画委員、代表質問者：橋本五郎、坪井ゆづる、佐藤千矢子、小竹洋之の各企画委員。▼新型コロナ感染防止対策として会場取材の定員を50人に制限し、オンライン参加を併用した。カメラはスチル、ムービーとも代表取材（別記）。登壇者の間にアクリル板を設置した。▼参加者数：会場（スチル、ムービー含む）126人、オンライン178人▼スチルは東京写真記者協会から９社と在日外国報道協会（FPIJ）代表（ロイター）。テレビ生中継をNHKと民放代表（テレビ東京）が行った。ムービーはニュース映画協会代表（フジテレビ）、東京写真記者協会代表（時事通信）、FPIJ代表（AP、AFP）のほかこれらの枠組みに入らない会員による代表２社。参加政党の一部が公式のスチル、ムービーを入れた。ラジオは国会放送記者会代表（TBSラジオ、文化放送）。日本記者クラブ写真撮影は津野義和氏（ガンマ通信）。





左から第１部司会の伊藤雅之企画委員、代表質問を担当した小竹洋之、佐藤千矢子、橋本五郎、坪井ゆづるの各企画委員



応酬を交わす自民党の岸田総裁（右）と立憲民主党の枝野代表

「地方創生」言及なく残念

井上　裕之（西日本新聞社特別論説委員）

「安倍・菅政治」をどう総括し、ポストコロナ時代をいかに切り開いていくか。記者クラブ側から鋭い質問も飛びだした今回の討論会はまずまずの内容だった。ただ、日本経済の再生と深く関わる「地方創生」について党首からの発言や質疑がなかったのは残念だ。

コロナは都市の過密リスクをあぶりだし、テレワークの推進、それと連動した地方への移住・産業の移転といった新潮流も生み出した。これらをどう生かすか。自民党が掲げる「デジタル田園都市国家」の具体像や各党の受け止めも聞きたいところだった。

日本のピンチをチャンスに変える前向きの議論も必要だろう。党首を一同に集める従来方式と併せて、オンラインでテーマや参加者を絞ったミニ討論会を開催し、地方の問題についても掘り下げる。そうした取り組みが次回からできないか。記者クラブとしての一層のデジタル活用を提案したい。

目次

▼９党党首討論会　2・3
▼クラブゲスト　5
田中浩一郎　慶應義塾大学大学院教授／内藤正典　同志社大学大学院教授／田村堅太郎　地球環境戦略研究機関プログラムディレクター／李智慧　野村総合研究所上級コンサルタント
▼会見リポート　6・11
大橋博樹　多摩ファミリークリニック院長、草場鉄周　日本プライマリ・ケア連合学会理事長、小林慶一郎　慶應義塾大学教授、湯﨑英彦　広島県知事／山本忠通　前国連アフガニスタン支援団代表／山下泰裕　日本オリンピック委員会会長／関谷直也　東京大学大学院准教授／平井伸治　全国知事会会長／木村敬一　東京パラリンピック競泳金メダリスト／藪崎拡子　赤十字国際委員会前カンダハル地域事務所副代表／斎藤幸平　大阪市立大学准教授／白川優子　国境なき医師団看護師／石倉洋子　デジタル監／木内登英　野村総合研究所エグゼクティブ・エコノミスト
▼土曜記者ゼミ　11
▼ワーキングプレス　12・14
眞子さま年内結婚スクープ　読売新聞社　小野沢記秀
自民党総裁選　産経新聞社　小川真由美
横綱白鵬引退　日刊スポーツ新聞社　佐々木一郎
▼新・列島報告　愛知県　15
名古屋入管ウィシュマさん死亡　中日新聞社　豊田直也
▼書いた話書かなかった話　16・17
昭和最後の日までの４７４日　内城喜貴
▼リレーエッセー　18
元首相・鳩山由紀夫さん　北海道新聞社　関口裕士
▼試写会「水俣曼荼羅」　19
▼マイBOOKマイPR　19
▼写真回廊　22

アフガニスタン　サイバー　脱炭素社会
森の中、まだ見ぬ木を探すように

9階にある自席の後ろに日比谷公園を見下ろせる。目の保養にと眺めるうち、気になる一本の木ができた。とんがり帽子の頂が樹々の上にちょこんと出ている。何の木だろう。昼休みに確かめに出た。

上から眺めた時に思ったほどたやすくはたどり着けない。下から見上げると様子が違う。径は曲がり、方角もわからなくなる。最初の昼休みには見つけられず数回、探索に出るはめになった。迷いつつ、取材のようだと思った。角度が変われば見え方も変わる。見方を変えつつたどり着くことに意義がある。勝手に納得する。そして、すっくと立つメタセコイアにたどり着いた。

そこで思い直した。木がそこにあることはあらかじめわかっていた。それを取材になぞらえていいものか。「こういう話をとってこい」と言われ、記事に合わせるように談話を求めた昔の苦い経験がよみがえる。手抜きのような取材が、「結論ありきだ」という既存メディア攻撃につながっているようにも思える。

うっそうとした森をさまようように、まだ見ぬ木を探す。そんな多様な意見の森を、記者会見をはじめとする様々な取り組みを通して提供できるようにしたい。

二つの試写会と15の会見

今月は二つの試写会と15の記者会見があった。会見のテーマは、東京五輪、パラリンピック、原子力災害と風評被害など。就任に伴う記者会見に全国知事会会長とデジタル監が登壇した。シリーズは新型コロナ、アフガニスタン、サイバー社会を続けたほか、新たに「脱炭素社会」も始めた。9党党首討論会もあった。

この中で、アフガニスタンについてはタリバン＝悪、に傾斜する報道への苦言もあった。現地発の報道に苦労する日本の報道機関には耳の痛い言葉、叱咤激励だったように思う。角度を変えれば、見え方も変わる。アフガニスタンという森に、タリバンの木は1本すっくと立っているわけではなく、多様な姿を見せているに違いない。

（江木）

日本記者クラブ賞・同特別賞の候補をご推薦ください

今年も、日本記者クラブ賞・同特別賞の候補者を募集します。

両賞の候補推薦を募集する案内を今月、プレスの基本会員と個人会員全員にお送りします（メール登録がある方にはメールで、ない方には郵送で）。

両賞とも、「プロが選ぶベストプロ」に与えられる賞として日本のジャーナリズムの高い水準を示すものであり、当クラブの公益目的事業でもあります。賞の趣旨をご理解いただき、両賞の候補を積極的にご推薦ください。未受賞であれば、以前、推薦された候補を再度、応募されても構いません。

来年1月31日（月）に推薦募集を締め切り、推薦委員会と選考委員会の2段階で審査。4月の理事会で受賞者が決まり、贈賞式は5月末に行います。

▼日本記者クラブ賞

この賞は、「取材、報道、評論活動を通じて、ジャーナリストとして顕著な業績を挙げ、ジャーナリズムの信用と権威を高めた個人を顕彰するもの」（日本記者クラブ賞規約第2条）です。会員または法人会員社に属する現役ジャーナリスト個人を対象に、個別のスクープではなく、最近数年間の業績を重視して選考します。クラブ会員であれば推薦できます。

創設から45年以上の歴史を持ち、これまで57人が受賞、２０２１年度の受賞者は、大久保真紀・朝日新聞編集委員と杉田弘毅・共同通信特別編集委員兼論説委員でした。

▼日本記者クラブ賞特別賞

２０１２年度に新設され、原則として会員以外のジャーナリズム活動を顕彰しますが、会員社の取材班・番組班などチームとしての業績も対象となります。また外国人や故人も対象です。クラブ会員だけでなく、日本新聞協会もしくは日本民間放送連盟の加盟社に属する方であればどなたでも推薦できます。

２０２０年度はＮＮＮドキュメントシリーズが受賞しましたが、残念ながら21年度は、受賞該当なしでした。

◇

両賞とも、所定の推薦書に推薦理由（２０００字以内）を記入し、参考資料を添えて提出してください。推薦書はクラブのウェブサイトからもダウンロードできます。詳細は事務局担当の村田（０３－３５０３－２７２７）へお問い合わせください。

今月のゲストの皆さん

ゲスト全員の会見リポートはウェブサイトで読めます。
出席欄の「会」は会場、「オ」はオンラインの参加人数

田中 浩一郎さん 慶應義塾大学大学院教授



「タリバンは90年代と変わっていない。内部を束ねるためにイスラム国家再興が不可欠」「行政能力はなく外国からの支援が必要だが、国際社会が抑圧的な政策をとるタリバンに支援はしない」「制裁を科せばアフガン国民への集団的懲罰になり人道的危機が懸念される」

■10・8／出席：会23人、オ53人／「アフガニスタン」②／司会：出川展恒委員

内藤 正典さん 同志社大学大学院教授



「日本のアフガン報道は欧米の論調をなぞりすぎている。タリバンを悪魔化するかのようだ」「タリバンはイスラム法に基づく政治をしており独自解釈していない。ジェンダー平等の概念がイスラムにはない」「貧困の人々への救済など生活者視点の報道が欠如している」

■10・15／出席：会15人、オ51人／「アフガニスタン」③／司会：出川展恒委員

田村 堅太郎さん 地球環境戦略研究機関（IGES）プログラムディレクター



産業革命前からの気温上昇を1.5度未満に抑える目標を達成するため、今が「決定的に重要な10年だ」と強調。エネルギーの脱炭素化に必要な石炭火力発電の廃止の動きの遅さに懸念を示し、「今、求められるのは希望を語ることではなく、具体的な行動だ」とした。

■10・22／出席：会12人、オ72人／「脱炭素社会」②／司会：江木慎吾専務理事

李 智慧さん 野村総合研究所上級コンサルタント



「中国は国家戦略としてデジタル化を推進、アリババなどIT大手の大躍進が迅速なデジタル実装を可能にした」「コロナ感染防止策では官民一体となりPCR、ワクチン接種などのデータを連携した全国統一の健康コードを１カ月内に完成。電子通行証として機能している」

■10・28／出席：会10人、オ39人／「サイバー社会」④／司会：竹田忠委員

下記のゲストの会見リポートは６～11ページに掲載しています

キヤノングローバル戦略研究所「コロナ危機下の医療提供体制研究会」メンバー

大橋 博樹さん 多摩ファミリークリニック院長
草場 鉄周さん 日本プライマリ・ケア連合学会理事長
小林 慶一郎さん 慶應義塾大学教授、キヤノングローバル戦略研究所上席研究員
湯﨑 英彦さん 広島県知事（全員リモート登壇）

■９・28／出席：オ98人／「新型コロナウイルス」⑭ 緊急時対応の強化に向けて／司会：竹田忠委員

山本 忠通さん 前国連アフガニスタン支援団代表

■９・30／出席：オ68人／「アフガニスタン」①／司会：杉田弘毅委員

山下 泰裕さん 日本オリンピック委員会（JOC）会長

■10・１／出席：会14人、オ45人／司会：福田裕昭委員

関谷 直也さん 東京大学大学院准教授

■10・１／出席：会４人、オ52人／「原子力災害と風評被害」／司会：黒沢大陸委員

平井 伸治さん 全国知事会会長、鳥取県知事

■10・７／出席：会11人、オ43人／司会：井上裕之委員

木村 敬一さん 東京パラリンピック競泳金メダリスト

■10・15／出席：会11人、オ21人／司会：森田景史委員

藪崎 拡子さん 赤十字国際委員会（ICRC）前カンダハル地域事務所副代表

■10・19／出席：会25人、オ53人／「アフガニスタン」④／司会：出川展恒委員

斎藤 幸平さん 大阪市立大学准教授

■10・20／出席：会28人、オ110人／「脱炭素社会」①／司会：竹田忠委員

白川 優子さん 国境なき医師団看護師

■10・21／出席：会31人、オ77人／「アフガニスタン」⑤／司会：杉田弘毅委員

石倉 洋子さん デジタル監

■10・22／出席：会20人、オ70人／司会：小竹洋之委員

木内 登英さん 野村総合研究所エグゼクティブ・エコノミスト

■10・26／出席：会15人、オ63人／「サイバー社会」③／司会：中山淳史委員

「新型コロナウイルス」⑭

緊急時対応の強化に向けて「かかりつけ総合医」の活用を

9月28日

新型コロナウイルス感染症対策で東京都などに出されていた緊急事態宣言は解除になったが、引き続き感染拡大への備えが求められている。

「コロナ危機下の医療提供体制と医療機関の経営問題についての研究会」は9月、緊急時対応の強化に向けて政策提言を発表した。強力な人流制限、ワクチン接種率の引き上げ、デジタル化加速など内容は多岐にわたるが、特に、医療資源の有効活用については具体的だ。

とりまとめた小林慶一郎氏（上左）が概要を説明。補助金を受けた医療機関のコロナ患者受け入れの「見える化」、補助金受け入れの実態調査などを指摘した。






川崎市内のクリニック院長、大橋博樹氏（上右）は8月に発熱外来患者数が急増した実情を語った。自宅療養者への新規往診依頼も毎日2～3名受けた。医師患者双方が信頼し合える「私のかかりつけ医」がいると、普段から予防接種や健診ができ、コロナ往診にも対応可能という。

草場鉄周氏（下右）は日本でプライマリケアが制度化されていない問題点を指摘した。コロナ感染の可能性がある患者へのオンライン診療を提供する用意がなく、自宅待機患者への診療も難しかった。英国でプライマリケアを担う総合医制度に関する質問に答えて、英国ではコロナ対応で総合医診療の多くがオンライン診療になり、薬もオンラインで処方できたと説明した。

湯﨑英彦氏（下左）は東京と地方の意識のずれや、テレビなどでの東京中心のコンテンツの問題を指摘した。地域の対策よりも東京・大阪の対策が放送時間を占拠していた。

全体として、大橋氏や草場氏が提案した、平時から健康管理を担うかかりつけ総合医の重要性が印象深かった。コロナ対応での混乱を教訓に、日本の医療制度を根本的に見直す時期に来ていると感じた。

企画委員　日本医学ジャーナリスト協会会長、朝日新聞出身　浅井　文和

「アフガニスタン」①

山本　忠通　前国連アフガニスタン支援団代表

国際社会はタリバンに機会を

9月30日



イスラム主義勢力「タリバン」が実権を握り、暫定政権を発足させたアフガニスタンが、再びテロの温床とならないか、人権が守られるかどうかが世界の関心を集めている。国連事務総長の特別代表として、去年3月まで、現地で支援の指揮をとった山本忠通氏が、現状を分析し、国際社会が果たすべき役割について語った。

山本氏によれば、タリバン内部では、政治部門と軍事部門が権力闘争を繰り広げており、政治部門は、旧政権時代の失敗を教訓に、開かれたイメージを演出して、国際社会からの承認と支援を得ようと考えている。一方、軍事部門は、厳しいイスラム教の解釈や戒律を固く守ろうとして非妥協的だが、どちらも、外からの協力や支援がなければ、統治が行き詰まることは理解している。治安面では、アルカイダの要人が入国したり、ＩＳ（イスラム国）がタリバンの不満分子をリクルートしたりしているという情報もあり、懸念は尽きない。

食料不足と物価高騰が深刻で、9割以上の国民が十分な食事をとれておらず、飢え死にする子どもも出ている。新たな難民・避難民の発生も起きている。アフガニスタンを安定させることが地域全体の安定のため不可欠であり、国際社会は、その視点で対応を判断しなければならない。過度の要求と制裁圧力でタリバンを追い詰めるのではなく、チャンスを与える必要がある。タリバンに対し、テロ組織と縁を切るよう、女性や少数派の権利を守るよう、国内全ての勢力を包摂した政権をつくるよう、国際社会が足並みをそろえ、粘り強く働きかけてゆく必要がある。

日本は、かつて驚異的な戦後復興を果たしたことや、常に人々に寄り添った中村哲さんの活動もあって、アフガニスタンの国民に敬意と親しみの目で見られている。それはタリバンも例外ではなく、日本は今後も国づくりに貢献できるはずだと結んだ。

企画委員　ＮＨＫ解説主幹　出川　展恒

山下　泰裕
日本オリンピック委員会（JOC）会長
10月1日

開催否定派3割　重く受け止め



日本オリンピック委員会（JOC）山下泰裕会長が、東京五輪を総括した。過去最多58個のメダルを獲得した成果について「選手、指導者、コーチの多大なる努力の成果が表れた。若い選手、チームゲーム（団体競技）での金メダルが躍進の大きな理由になった」と説明した。

コロナ禍での開催に「感染症対策との闘いでもあった」。海外勢は競技5日前に選手村入り、競技終了後48時間以内の出国がルール。選手村、練習会場、試合の行き来となり直前調整は困難だった。日本は自国の利を生かしてハイパフォーマンスセンター、専用食堂を利用して成果につながった。山下会長は会場で海外関係者に「申し訳なく思う」とわびた。その際の返答は「何を言っているんだ、大会をよく開催してくれた」と好意的だった。無観客開催については「それ以外の選択肢はなかった。海外の方々も納得している」。その一方で元アスリートとして「何か寂しい、むなしい気持ちがあったのも事実です」と率直に口にした。

SNS時代ならではの、負の部分にも言及した。コロナ禍で選手には出場辞退を求める声などが寄せられた。自身は1980年モスクワ五輪ボイコットを経験。多くの励ましの中で「あなたは自分のことだけ考えて、五輪に参加させてほしいという。アフガニスタンでどれだけの人が亡くなっているのか」という手紙もあった。「かつてそういう経験をして、JOC会長という立場でありながら、選手に寄り添えたか。はなはだ力不足だった」と謝罪した。

開催についてさまざまな意見があった五輪。「閉幕後の世論調査は、国民の6割は好意的だった。一方で3割は開催すべきではなかったという意見。この3割を重く受け止めるべき」。JOCとして今後、スポーツの価値向上、オリンピズムの推進、憧れられるアスリートの育成など、取り組むべき課題を挙げた。

日刊スポーツ新聞社スポーツ部
益田　一弘

関谷　直也
「原子力災害と風評被害」
東京大学大学院 准教授
10月1日

海洋放出　説明し尽くす必要



これまで各地で起きた原子力災害に伴う風評被害に、社会心理学の手法でアプローチしてきたという。では、風評被害とは何か。安全が関わる社会問題（事故や環境汚染など）が報道された後、本来は安全な商品や土地が危険視され、消費や観光をやめることにより引き起こされる「経済的被害」と解説した。

1954年にマグロ漁船「第五福竜丸」がビキニ環礁で死の灰を浴びると、国内各地で放射性降下物が確認されたことが大々的に報道され、魚介類全般が売れなくなる「放射能パニック」が発生。国は56年、「間接損害」という風評被害を国家予算として初めて認めた。その後も、81年に日本原子力発電・敦賀原発であった放射性物質漏れ、99年にJCO東海事業所で起きた臨界事故などが続くが「いつも漁業者が被害を受けている」という指摘には、思わずうなずいた。

風評被害の原因を考えた時、東京電力福島第一原発事故の場合、メディア側にも課題があり「全国メディアがジャーナリズムとして問題提起型の報道をした結果、消費者に悪いイメージを与えた面がある」との見方を示した。福島県産の食品について、県民の拒否感が低下していったのは、検査体制が確立されて安全性に問題がないと理解を深め続けたからだと分析した。一方、海外、特にアジアでは今でも福島第一原発などの情報が正確に伝わっておらず、10年前の状況から理解が進んでいないため、不安感が持続されている。こうした点を踏まえ「現状について、誤解のない情報や事実を伝えるのが重要」と説いた。

最後に、福島第一原発の処理水の風評被害対策にも触れた。「漁業関係者は海洋放出に納得しないが、それでも政府・東電は説明し尽くさなければならない。それなのに、声を聞く努力が足りておらず、それがないままになっている」。今日までこの問題をこじらしてしまった要因を、端的に突いていた。

毎日新聞社科学環境部　奥山　智己

平井　伸治　全国知事会会長

コロナ「ともに闘う知事会」に

10月７日



９月３日、全国で最も人口が少ない鳥取県の知事として初めて全国知事会の会長に就任した。歴代最多の40道府県の知事の推薦を受けた。物腰が柔らかく、時にユーモアを交える語り口が平井伸治会長の持ち味だ。飯泉嘉門前会長のもとで新型コロナウイルスの対策本部の本部長代行を務めていたから、今回の就任は順当といえるのだろう。

就任と同時に掲げたスローガンは「ともに闘う知事会」である。今回の会見でも「政府はもちろん、さまざまな団体とパートナーシップを結び、共通の敵であるウイルスと闘いたい」と強調した。早速、日本医師会の中川俊男会長らとオンラインで意見交換会を開いた。

知事会はかつて、単なる親睦団体に過ぎなかったが、それを変えたのが２００３年に会長になった当時の梶原拓岐阜県知事だった。「闘う知事会」を標榜して政府に地方分権改革の断行を迫った。それを支えたのが増田寛也氏や片山善博氏ら「改革派知事」と呼ばれた面々だった。平井会長が掲げたスローガンはこれを強く意識したものなのだろう。

会見では鳥取でのコロナ対策を紹介しながら、政府に対して「現場の声を聞いてほしい」と繰り返した。その一方で「国と地方を対立の構図で見るべきではない」とも主張した。14世紀に世界で感染が広がったペストの後にルネサンスが起きたことにふれながら、コロナでも地方移住のパラダイムシフトが生じていると指摘し、国に協力を求めた。

地方を縛るさまざまな基準の見直しや「国と地方の協議の場」に分科会を設置することも提案した。いずれも知事会が長年求めてきた課題だ。

首相の所信表明演説から「地方分権」という言葉が消えて久しく、岸田文雄首相の10月８日の演説でもまったく言及されなかった。コロナで知事の役割が改めて注目されるなかでの登板である。分権改革を再起動できるかどうかも平井会長の手腕にかかっている。

日本経済新聞社編集委員　谷　隆徳

木村　敬一　東京パラリンピック競泳金メダリスト

10秒強 頂点への自問自答

10月15日



東京パラリンピック競泳男子百メートルバタフライで、悲願の金メダル獲得に至るまでを、詳細な描写と自己分析で振り返った。心に浮かぶように描き出す言葉と、一瞬一瞬に及ぶ記憶。視覚情報に頼らず、内面や思考と向き合う生き方のゆえだろうか。

レースでの思いをこう振り返る。「期待と、負けたらという恐怖が入り交じり、前夜はほとんど眠れなかった。レース前は内臓が宙に浮いているような緊張感。すごくのどが渇いているのに、水を飲むと吐いてしまいそうな感覚の中で始まった」

本番では75メートル過ぎでコースロープに接触し一気に減速。最後の20メートルは「最後まではもう持たない。このまま負ければリオの時と同じだ。自分は結局、そういう星の下なのか。いや、あの思いだけはもう二度としたくない」――心の葛藤の中で「ゴールに流れ着いた」のだという。時間にして、10秒強のことだ。

以前彼に、金メダルばかりを考え過ぎない方がいいのでは、と失礼な助言をしたことを思い出す。勝ちを意識し平常心を失った選手の事例は少なくない。でも木村選手はあくまで自分の内面と向き合い、恐怖を見つめ、それを突き抜けて頂点をつかんだ。思いの強さに脱帽したい。

優勝を知った瞬間だけは、形容しがたいという。「あの感情を揺さぶられた瞬間は、この先どれだけそういう思いができるか。この世に生を受け、生きてきて良かったと、心から思わせてもらいました」。表現し得ないことが、むしろあふれる喜びを伝えてくる。ありのまま、それが支えて来た人々やライバルまでをも引きつける彼の人間性だ。

コロナ禍で「開催を信じることしかできなかったしんどい時間」を経て実現した夢。「様々な障害を持つ人が世の中に生きていると知り徐々に距離感が縮まれば、人と人との違いを楽しめる社会がやってくるのでは」。メッセージを受け止めたい。

読売新聞社編集委員　結城　和香子

「アフガニスタン」④

藪崎　拡子

赤十字国際委員会（ICRC）前カンダハル地域事務所副代表

10月19日

タリバン復権、劇的悪化なし



米軍撤退に揺れるアフガニスタンでの25カ月の勤務を9月末に終え、帰国した。ICRCはアフガン20カ所の拠点で、95人の外国人と約1700人の現地スタッフが医療を中心とした人道支援を継続している。自前の飛行機2機もあり、帰国にあたって南部カンダハルからタジキスタンに出るのは何の問題もなかった。

新型コロナウイルスによる移動規制もあり、「現地にべったり」という生活の中、8月中旬、アフガン政府軍の戦車が事務所周辺を取り囲み、建物が揺れるほどの激しい銃撃戦があった。ところが、戦車は10分ほどであっけなく姿を消す。しばらくすると、タリバン兵が行進し、そのパレードに市民が徒歩や自転車で続いた。タリバンが発祥の地であるカンダハルを再掌握するのを目の当たりにした現地スタッフが「信じられない。こんなに早く…」と青ざめた顔でつぶやいた。

しかし、タリバンが戻って来たところで、「何かが劇的に悪化したということはない」というのが現地での率直な感想だ。メディアでは女性の権利抑圧などが伝えられるが、「急に女性の立場が悪くなったとも思わない。例えば保守的な南部では女性スタッフが親族の男性に付き添われるのは以前から当たり前だった」と話した。

ICRCは紛争地で全当事者と対話することで支援活動の領域を広げてきた。藪崎さんも毎日のようにタリバンと交渉し、「普通の役人と同じ」との印象を持つ。だから「タリバンは残虐で恐ろしい」というイメージには違和感を覚える。

むしろ、恐ろしいのはアフガンが国際社会から忘れ去られることだ。「今の注目はいつまでも続かない」との指摘は、この20年間のアフガン報道を思えば、筆者にとっても耳が痛い。

アフガンの人々にとって、厳しく、辛くなるであろう冬が迫っている。

企画委員　読売新聞社調査研究本部主任研究員　大内　佐紀

「脱炭素社会」①

斎藤　幸平

大阪市立大学准教授

10月20日

大量消費やめ「脱成長」社会を



「コロナ禍が最大の危機ではない。これからやってくる危機のリハーサルにすぎない。それが気候変動」―。シリーズ企画「脱炭素社会」の1回目のゲストとして登壇した斎藤幸平・大阪市立大学准教授はこんな言い回しで地球温暖化に警鐘を鳴らした。

主張は明快だった。脱炭素社会の実現には「脱成長」が必要だということ。つまり、地球温暖化は資本主義の帰結であり、資本主義は成長を前提とする経済システム。目いっぱい生産し、消費することを是とする。そうしたシステムを温存したままでは気候変動は防げない。だからグレートリセットをし、成長を前提としない社会を構築しなければならない。

経済成長しながらCO_2排出量を減らすデカップリングを実現した国がないでもない。しかし、温暖化防止効果は限定的であり、世界がネットゼロを目指す2050年には間に合わない。CO_2を大気中に放出しない技術も開発されつつあるが、新技術が登場してもフル生産を続ければいずれ限界が来る。

加えて、ただ気候変動を防げばいいというものではないとも言う。例えばバイオマス発電を増やす場合、発展途上国の広大な土地を占有して栽培した植物を輸入して原料にするのでは形を変えた植民地主義であり、地球規模で不平等や格差拡大を助長すると指摘した。

では私たちはどうしたらいいのか。まずは大量消費をやめるべきだと説く。大量消費がなくなれば短期的には経済にマイナスだが、引き換えに安定した気候の下で暮らせるので「成長しなくても潤沢な社会はつくれる」とした。そして、そのための財源として、プライベートジェット機を乗り回すような富裕層への増税を挙げた。

にわかに実現可能とは思えない話ばかりだったが、そう感じるのは気候危機を過小評価しているからだということらしい。考えさせられた。

企画委員　時事通信社解説委員　小林　伸年

「アフガニスタン」⑤ 白川 優子 国境なき医師団 看護師

10月21日

患者殺到、国際支援の継続を



イスラム主義勢力タリバンが首都カブールを制圧してからわずか11日後。8月26日に国境なき医師団（MSF）の看護師、白川優子さんはアフガニスタンに入った。シリアやイエメンなど、世界中の紛争地で活動してきたが、今回の派遣は2018年以来3年ぶりだった。

活動場所のヘルマンド州ラシュカルガに入り、まず目にしたのは「人々の日常」。市民が買い物をし、子どもたちが遊んでいた。女性がブルカで顔を覆い隠すことなく、一人で道を歩く姿もあった。

職場の州立ブースト病院は人口130万人を擁する地域の基幹病院。働く職員は800人に上る。戦闘が終わり、人々が病院にアクセスしやすくなったこと、そして国際援助が止まり、多くの病院が運営停止に追い込まれたことで、ブースト病院には患者が殺到していた。

「多い日には24時間で800人以上の患者が来て、300床ある入院病棟は常に満床だった」。呼吸器疾患などを患う子どもが栄養失調になり、複合的な要因で毎日のように亡くなっていった。白川さんは「アフガニスタンへの国際支援の継続が必要だ」と繰り返し強調した。

院内の手術室を運営する管理職として、看護師や清掃員ら約50人の現地スタッフを統括した。スタッフたちはみんな明るくまじめ。だが8月までラシュカルガでも続いた戦闘で、家を壊されたり、物を奪われたりした人もいた。彼らの笑顔の裏には苦しみがあることを知り、「胸が張り裂けそうになった」。

当初、派遣の打診を受けた際は戸惑ったという。現在はMSFの日本事務局で働き、日本での平和な生活から離れたくないとの思いがあった。だが実際に現地に入ると、頻繁に紛争地に行っていた以前の自分がよみがえってきた。5週間を過ごし、困難な現場でも真摯に医療に取り組む仲間にも出会えた。白川さんは「本当に行ってよかった」と振り返った。

朝日新聞社国際報道部　笠原　真

石倉 洋子 デジタル監

10月22日

官僚に欠ける「顧客志向」 根本突き詰めぬ姿勢が問題



デジタル庁の発足から約2カ月。事務方トップの石倉洋子デジタル監には「官」を革新することの難しさや課題が見えてきているようだ。これまでの日本政府には、顧客志向が欠けていて「ユーザーとは誰か？どういうことをしてあげれば良いのか？　といったことをあまり考えてこなかった」という。

だからユーザー・エクスペリエンス（UX、顧客体験）が大切と言われても「それがどういうことか分からない」し、「国民とは誰なのか？このサービスは誰のためにあるのか？」という問いにも明確な答えを出せなかったのだという。

石倉さんは、根本的なところを突き詰めないまま次々と政策を打ち出す官のあり方に問題意識を持っているようだった。マイナンバーカードの普及が思うように進まないことへの対応も「『なぜそうなのか？』を考えることより『こういうことをやった方がいい』にどんどん行っちゃう」と厳しい。確かにカードの使途は保険証やハローワークなど次々と広がるが、私たち国民の需要のど真ん中に球を投げられている感覚は乏しい。

課題は官だけでなく、日本社会全体にも通じるところがある。日本人は総じて「ハウツーが好き」で思考が「いきなりボーンと飛んじゃう」傾向があるという。例えば日本の女性活躍議論も、革新を生む組織になるには人材の多様性が必要であるといった『それによって何をしようか』がないとうまくいかない」と映るようだ。

デジタル庁が掲げる「誰一人取り残さない、人に優しいデジタル化」というスローガンについては「本当にそれでいいのかという気がしないでもない」という本音も漏れた。石倉さんが向き合うべきは、官にとどまらない日本社会全体の旧弊・悪弊だ。言葉の端々に示された日本への違和感をどうか持ち続けてほしい。そう思わせる会見だった。

日本経済新聞社デジタル政策エディター　八十島　綾平

「サイバー社会」③

木内　登英

野村総合研究所エグゼクティブ・エコノミスト

10月26日

今なぜ、デジタル通貨なのか



デジタル通貨が、自民党や日銀で真剣に検討されている。きっかけは中国によるデジタル人民元の取り組みだ。日本も、隣の超大国の動向には無関心ではいられない。ただ、「デジタル通貨」や「決済システム」といった概念はとっつきにくい。野村総合研究所エコノミストで元日銀審議委員の木内登英氏は、中央銀行発行のデジタル通貨がわれわれの生活に関わる身近な問題であることを、会見でわかりやすく解説してくれた。

背景にあるのは米国による対中包囲網だ。米バイデン政権のもと、「中国にとってより厳しくなっている」と木内氏。中国は、「一帯一路」の経済圏確立を目指すが、そこで使われる通貨もドル。その決済は「スイフト」と呼ばれる国際システムの管理下にある。いざとなれば、米国は中国によるドル調達をストップできる。「どこかでドルが調達できなくなったら、（中国は）貿易も成り立たなくなる」と木内氏は話す。

米国の金融支配への対抗手段が、デジタル人民元だ。周辺諸国も視野に入れたこの構想は、「アメリカの支配から逃れていこうという狙いが恐らくあるのではないか」と木内氏は分析する。民間のデジタル・プラットフォーマーが金融分野を支配することを未然に阻止する狙いもあるようだ。

米中デカップリングやプラットフォーマー規制が進むと、将来はどのような世の中になるのか。中国は「比較的効率の悪い経済圏になってしまう恐れもある」と予想する。

西側陣営も無傷ではいられない。ドル資産の買い手である中国の需要がなくなれば、ドル暴落の可能性もあると木内氏。日本の機関投資家にとっても、対岸の火事ではなくなる可能性がある。

こうした予測は、にわかには信じがたいかもしれない。だが、世の中は大転換期にある。「想定外」に驚かされないよう、木内氏は思考の柔軟性を説いているようだ。

日本経済新聞社ＮＡＲ編集部　大辺　暢

土曜記者ゼミ

調査報道⑤　10・2／ネット56人

講師　曺琴袖　ＴＢＳ「報道特集」編集長、岸将之　ＴＢＳ記者

■「共有」の重要性

下請けへの丸投げ、アルバイトの紹介料、弁当の大量廃棄、コロナ対策の抜け穴…。番組は東京五輪の運営を巡る問題を明らかにしている。キーワードは「共有」。曺編集長が８年ぶりに番組に戻った昨夏、社内には調査報道に消極的な雰囲気が漂っていた。「魅力を感じてもらうためには、複数の記者で取材してシェアすることが大事」。一人の記者が取材する体制を変え、自身も取材に立ち会った。

岸記者は十年来の知人をたどり、資料の真贋を見極めた。内部告発者には当初、カメラの前での証言を断られたが、粘り強く説得し、人間関係を築き、信頼を得た。「相手と問題意識を共有することが大事」と説く。番組はユーチューブでも情報提供を求め、感想を細かくチェックし、返信を欠かさなかった。視聴者との共有も重要だった。

曺氏は「番組は政権批判が多いと批判されるが、ファクトは炎上しない。調査報道の確証になった」と言う。その言葉に勇気づけられた。

朝日新聞社名古屋報道センタースポーツグループ　木村　健一

ＩＴ編⑤　10・23／ネット52人

講師　藤原大湖　米国「ボストン・グローブ（Boston Globe）」Newsroom Developer

■米のビジュアライゼーション事情

読者に分かりやすく情報を伝えるため、いかにグラフィックスを効果的に盛り込むか。有効なツールの一つとして、「flourish（フローリッシュ）」の活用事例を学んだ。

藤原さんは、複数のオープンデータを組み合わせて地図上に落とし込む作業を実演。大統領選やメジャーリーグ報道など、最近の米国メディアでの実践事例も紹介した。選挙や災害など、さまざまな場面での活用の可能性を実感した。

藤原さんの所属するボストン・グローブでは、毎朝のミーティングでウェブサイトの閲覧状況などからその日の１面の紙面をどう作るか決める。記事には署名に加えメールアドレスも記載し、読んだ感想などが記者やデザイナーに直接届くという。読者との距離の近さも興味深かった。

工夫を凝らしたグラフィックスの活用は、報道の可能性を広げてくれる。自分の仕事にどう落とし込むか、早速考えて実践してみたい。

下野新聞社編集局社会部　東山　聡志

眞子さま年内結婚スクープ

儀式なき異例の形の衝撃

「私」に「公」優先　皇室の厳しさ

小野沢　記秀（読売新聞東京本社社会部／宮内庁クラブキャップ）

その発言を聞いた時、メモする手が震えたのを覚えている。

「多くの人が納得し喜んでくれる状況にならなければ、婚約に当たる納采（のうさい）の儀を行うことはできません」

２０１８年11月、秋篠宮さまは誕生日前の記者会見で、延期されていた長女の眞子さん（30）と小室圭さん（30）の結婚について、こう述べられた。会見という公の場で、週刊誌が報じる小室家の金銭トラブルへの対応を求め、婚約の儀式の条件とされるとは思ってもいなかった。

皇族女子が儀式を行わずに結婚すれば、戦後初の極めて異例な展開となる。「大変な発言だ」と感じたものの、この時はまさか現実のことになるとは想像できなかった。

「秋篠宮さまの判断次第」

「本当に異例な結婚になってしまうのではないか」。そんな感触が強まったのは今年６月頃。２カ月前に小室さんが公表した金銭トラブルの説明文書が世間の批判を浴び、関係者は「もはや国民の理解を得るのは難しくなった。秋篠宮さまの判断次第では、儀式なしもありうる」と漏らすようになった。

取材のポイントは①結婚の時期②婚約・結婚の儀式の扱い③最大１億５２５０万円の一時金を支給するかどうか――の３点だった。



小室眞子さんと圭さんの記者会見場で、宮内記者会の幹事社として宮内庁幹部から回答書を受け取る小野沢記者（右）（10月26日／東京都千代田区のホテル／代表撮影）

週刊誌やＳＮＳによるバッシングで、眞子さんの心身が「ギリギリの状態」に追い込まれ、小室さんの生活基盤が整えば結婚する方向で調整されていることもわかった。７月下旬には、小室さんが米国の法律事務所への就職が内定したことも判明。結婚の条件は整いつつあった。

多くの国民が注目する眞子さんの結婚。その動きが大詰めを迎えていることは、他社もキャッチしている様子だった。宮内記者会の他社には新聞協会賞をとった名物記者２人をはじめ、警視庁クラブなどで鳴らした事件記者が詰めている。他社の記者がひそひそ話や離席して電話するたびに、焦燥感を募らせた。

「新型コロナの緊急事態宣言が解除されれば、宮内庁が結婚の日程を公表する」との情報を得たのは８月下旬だった。９月12日（後に延長されて30日）の解除期限まで、残された時間は少ない。裏取りに奔走し、①結婚の時期は「年内」②儀式は行わない――との確証を得た。

残る焦点は、儀式を行わない理由を宮内庁がどう説明するかだった。「コロナ禍のため」とすることも想定されたが、あくまで「多くの人が納得し喜んでくれる状況ではない」と明言する方針とわかった。まな娘への思いを抑え、自らの発言に責任を持とうとされる秋篠宮さまに「私」より「公」を優先する皇室の厳しさを見た気がした。

９月１日付朝刊１面で「眞子さま年内結婚　儀式行わぬ方向」とスクープした。一時金は、政府の対応が決まっていなかったため、眞子さんが辞退の意向を漏らしていることにとどめた。政府の方針が固まった後、25日付朝刊１面で「眞子さま一時金不支給　政府最終調整」と報じた。

薬指に指輪　祝福の思い

緊急事態宣言が終了した翌日の10月１日、結婚の日程が発表された。同26日、眞子さんは小室さんと結婚し、皇籍を離脱した。

この日の記者会見で、口頭での質疑応答が直前に取りやめになったのは残念だったが、ひな壇に座る２人の左手薬指に光る結婚指輪を見て、新たな船出を祝福したいと思った。

皇族の「公と私」など皇室のあり方そのものが問われた今回の異例の結婚。皇室に残された重い課題を今後も掘り下げていきたい。

おのざわ・のりひで▼２００４年入社　静岡支局　東京本社社会部に　14年から４年半宮内庁記者クラブ　警視庁クラブを経て　20年７月から現職

自民党総裁選

派閥の論理 国民的人気覆す 派閥単位の従来取材 通ぜず

小川　真由美（産経新聞社政治部前首相官邸キャップ）

9月の自民党総裁選は永田町の〝常識〟を覆す異例の展開をたどった。派閥単位の従来取材では全体像がつかみにくかった総裁選の舞台裏を報告する。

今回の総裁選を制したのは党内第5派閥の岸田派（宏池会）を率いる岸田文雄氏（現首相）だ。事前の予想を覆し、1回目の投票で第2派閥の麻生派（志公会）に所属する河野太郎氏（現党広報本部長）に党員票と国会議員票の合計1票差でトップにたった。岸田氏の勝因は派閥の垣根を越えて幅広い国会議員票を得たためだ。

114票にどよめき

一方、派閥の存在意義を揺るがせたのは1回目の投票で国会議員票114票を獲得した高市早苗氏（現党政調会長）だろう。高市氏は河野氏の86票を28票上回り、146票で1位となった岸田氏に32票差まで迫った。高市氏の得票数が表示されると投票会場がどよめいた。

高市氏は党内最大派閥の細田派（清和政策研究会）に強い影響力を持つ安倍晋三元首相の全面支援を受けた。とはいえ、細田派が全員高市氏を支援しても100人に満たない。そもそも高市氏は無派閥で、特定の支持基盤を持たず、岸田氏や河野氏、野田聖子氏（現少子化担当相）と違い、これまで総裁選出馬に向けた推薦人集めをしたこともなかった。事実上、ほぼゼロからの出発だった上、細田派の中には安倍氏の高市氏への傾斜に違和感を抱く議員もいた。だが、安倍氏に近い議員のほか、高市氏に主張が近い他派閥の一部議員の支持も確保した。

実は菅義偉首相（当時）の総裁選再選がメーンシナリオだった8月の早い時期、安倍氏は周囲に総裁選出馬候補として高市氏を挙げていた。菅政権は防衛や皇位継承、憲法改正など、安倍氏が第2次政権で重視した政策が後退したような印象があった。自身と国家観が近い高市氏が出馬すれば、党内議論が活性化するだろうと期待してのことだ。



自民党の岸田文雄新総裁を真ん中に並んだ菅義偉首相（当時）と候補者ら（9月29日／東京都港区／産経新聞社提供）

漁夫の利で勝利

状況が一変したのは国民的な人気を持つ河野氏の総裁選出馬表明だ。河野氏は女系天皇容認や脱原発を持論とし、党内の河野氏への反発は根強かった。安倍氏を中心に「河野総裁阻止」に向けた高市氏支援の動きが広がり河野氏は失速。〝漁夫の利〟で岸田氏が勝利した。首相退陣から1年以上経た今も、安倍氏が政局の中心であることを裏付けた。

河野陣営の取材も難しさを極めた。河野氏が所属する麻生派は、中堅が河野氏支持の一方、河野氏と考えが違うベテラン議員は岸田氏と高市氏支持に回り、派閥は事実上分裂状態に陥った。しかも、河野氏支持に回った石破茂元幹事長、小泉進次郎前環境相、菅氏はともに無派閥な上、河野陣営との連携も希薄で、河野氏本人以外は選挙戦略の全体像を把握していないという状況だった。

それでも、河野氏が獲得した党員票は全体の44％でトップ。多くの国民から支持されても事実上首相を決める自民党総裁になれるとは限らない―。河野氏の敗北は権力闘争の源泉である派閥軽視ゆえだが、政治記者として読者にわかりやすく伝える難しさを感じたのもこの点だ。

総裁選の影響は今もくすぶっている。岸田内閣で麻生派の甘利明幹事長が抜擢された一方、高市氏は党政調会長にとどまり、安倍氏に近い議員の要職起用も見送られた。10月の衆院選で自民党は絶対安定多数を確保した一方、甘利氏が選挙区での敗北を受けて幹事長を辞任し、茂木敏充外相が後任に内定するなど政権運営は波乱含みだ。今後も各派閥の動向に目が離せない日々が続く。

（11月1日・記）

おがわ・まゆみ▼2001年入社　社会部　文化部　経済部を経て　15年より政治部　官房長官番　平河サブキャップ　外務省キャップを経て　20年7月まで首相官邸キャップ

横綱白鵬引退

ぶつかり45分、稽古場の「恋人」

佐々木　一郎（日刊スポーツ新聞社編集局スポーツ部次長）

大相撲の横綱白鵬が引退した。多くのメディアで、その功績や近年の横綱らしからぬ言動まで、あらゆる側面が報じられた。当欄では、「稽古場での白鵬」を記したい。史上最多45回の優勝は、どんな稽古が下地にあったのか。

土俵は同じ、狭くても

白鵬は15歳でモンゴルから来日し、宮城野部屋へ入門した。当時の宮城野部屋は東京都墨田区緑にあり、白鵬が横綱に昇進して35回目の優勝を果たした後の2015年8月末まで稽古場として使ってきた。

その後、宮城野部屋は墨田区八広（やひろ）に移転した。理由は、建物の耐震構造に問題が発生したため。確かに、力士たちが勢いあまって羽目板にぶつかると、どーんという音とともに建物全体が揺れるような感覚があった。激しい稽古だったことも一因だが、この稽古場は何より狭かった。

土俵の大きさは本場所と同じ直径4・55メートル（15尺）。この稽古場は徳俵から羽目板まで1メートルもなかった。他の部屋と比べても明らかに狭く、トレーニングルームがあるわけでもない。風呂も狭い。それでも白鵬は横綱に上り詰めた。「今となれば、狭いかもしれません。でも、土俵は同じ大きさがありますから」と話していた。稽古環境を言い訳にせず、いかに精進したかがよく分かる。



思い出深い宮城野部屋の稽古場で、真新しい綱を締めて集合写真を撮る白鵬（2015年8月30日／東京都墨田区／日刊スポーツ新聞社提供）

当時、稽古場での思い出を聞くと「きつかったときの稽古です。この土俵で、ぶつかり稽古を45分間もやった記録が残っていますからね」と教えてくれた。ぶつかり稽古は一般的に、最後の仕上げとして行われる。土俵の端から端まで、胸を出してくれる相手力士に向かってぶつかり、前傾姿勢で押していく。全力を出し切るため、3分もやればヘトヘトになる。最もきつい稽古の一つだ。

白鵬は番付が三段目のころ、この強度の稽古を毎日のようにこなした。関取になる前の時期で、素質を見込まれた白鵬は、部屋全体で鍛え上げられた。ぶつかり稽古で胸を出していた力士は、白鵬の兄弟子の荒若。体重は約200キロもあった。長時間のぶつかり稽古は、胸を出す方もきつい。荒若が履いていた足袋は、2、3日で穴が開いた。当たりが弱いと、白鵬は転がされ、砂まみれになった。そして、泣いた。つらい時は1人で屋上に上がり、モンゴルの方角の空を見上げ、心を整えた。

移転について白鵬は「恋人と別れる。青春ってそういうことだね」と詩的に言った。八広に移転する際、テッポウ柱や土俵の土は、そのまま引き継がれた。移転先もまた、狭かった。バイク店だった建物を居抜きで改装し、稽古場にした。白鵬はそれから、10回の優勝をさらに積み上げた。

見てもらいたい一心で

白鵬の引退会見で、宮城野親方（元幕内竹葉山）は「自分の方から『稽古はやるな』と言ったことはあるけど、『やれ』と言ったことは一度もない。逆に止める側でした。あまりにもやりすぎるから、もういいからやめなさいと。そういうことは何回もありました」と振り返った。白鵬は「多分、正直に言えば、稽古を好きな人はいないと思いますけど、強くなりたい、恩返ししたいという気持ちがあったものですから、親方の言う通りに、親方に褒めてもらいたい、見てもらいたいという一心でやっていました」と話していた。

苦しい稽古の末にたどり着いた記録ずくめの大横綱。間垣親方となった白鵬は、いずれ部屋を新設する日が来る。あの土俵の土、テッポウ柱は、引き継いでいくのではないかと想像している。

ささき・いちろう▼1996年入社　広告局　電子電波情報本部を経て　99年からスポーツ部

新・列島報告60　愛知県
名古屋入管ウィシュマさん死亡

差別意識のぞく職員の対応
救えなかった悔いと自戒と

豊田　直也
（中日新聞社名古屋本社社会部）

「名古屋入管に収容中のスリランカ人女性が嘔吐を繰り返しているのに、病院に連れて行ってもらえない」。ウィシュマ・サンダマリさん＝当時（33）＝の支援者から相談を受けたのは、2月3日のことだった。名古屋出入国在留管理局に抗議の電話をし、すぐに病院に連れて行くよう求めた。2日後に外部の病院を受診できたと聞き、当時はこれで大丈夫と安心してしまった。

それから1カ月が過ぎた3月6日深夜。名古屋司法記者クラブの連絡網で、名古屋入管から収容者の死亡の連絡を受けた。「30代のスリランカ人女性」と匿名の発表だったが、すぐに分かった。「あの時、他にできたことはなかったか」。悔いと責任を感じながら、取材を始めた。

■食事をしては吐くように

手紙で交流していた支援者への取材で、ウィシュマさんの足取りが見えてきた。日本の子どもに英語を教える夢を持ち、2017年に来日。千葉県の日本語学校を約1年でやめ、交際相手と静岡県に移り住んだ。昨年8月、交際相手の暴力から逃れるために交番に駆け込んだが、不法残留の疑いで逮捕され、名古屋入管に収容された。収容生活が半年になった今年1月半ば、食事を口にしても吐くようになり、支援者に手紙で「ほんとうにいまたべたいです」と訴えた。希望した仮放免や点滴治療がかなえられないまま亡くなった。

なぜ必要な医療を受けられないまま亡くなったのか。関係者から診療記録を入手するなどして取材を続けたが、名古屋入管は「医者の診断に従って適切に対応した」という態度を崩さなかった。来日した遺族が求めた監視カメラ映像の開示についても、入管側は「保安上の理由」を挙げて拒否していた。こうした対応に、真相の究明を求める野党が反発。入管難民法改正案の国会審議に影響し、与党が改正案を取り下げる事態にもなった。

■入管行政への関心の低さ

ようやく入管側の問題が明らかになったのは、8月。出入国在留管理庁が公表した調査報告書で、カフェオレを吹き出したウィシュマさんに対し、職員が「鼻から牛乳や」とからかっていたことが発覚。飢餓状態を示す尿検査の結果も放置されていた。10月には弁護団が名古屋地裁で監視カメラ映像の一部を閲覧し、ウィシュマさんがほぼ動けないほど衰弱しても対処されていなかったことが分かった。一連の対応からは、当時の上川陽子法相の「大切な命を預かる施設」という説明とはかけ離れた、職員の差別意識が垣間見えた。


ウィシュマ・サンダマリさんの遺影を手に名古屋出入国在留管理局を訪れる遺族ら（5月17日／名古屋市港区／中日新聞社提供）

入管施設では07年以降、17人の収容者が亡くなっている。施設内の実態を把握しようと、名古屋入管で他の収容者に面会するなどして話を聞いてきた。収容者からは「ウィシュマさんが亡くなった後も、入管の処遇が改善されていない」とも聞く。

そもそも入管行政への関心の薄さが入管の横柄さを許してきた、という反省もある。名古屋入管では昨年10月にもインドネシア人男性が亡くなっているが、当時は同僚が電話取材で愛知県内版に18行の記事を掲載しただけだった。私も含め、司法担当の記者が入管当局の権限行使をウオッチしている自覚は乏しかった。

今後は、名古屋地検の刑事処分が控え、遺族も国家賠償請求訴訟の提訴を予定している。司法の場で、入管の対応がどう裁かれるかが焦点となる。外国人との共生が社会課題となる中、司法判断を経ない無期限収容などの制度上の問題も棚上げになったままだ。反省と自戒を胸に地道に取材を続けることで、入管の闇に光を照らせると考えている。

とよだ・なおや▼2010年入社　岐阜支社報道部　富山支局　大阪支社報道部を経て　19年3月から名古屋本社社会部　20年7月から司法担当

昭和最後の日までの474日
「聖上」のご病状を追った日々



内城　喜貴（うちじょう　よしたか）

一橋大学社会学部（社会心理学専攻）卒　1977年共同通信社入社　京都支局　大阪社会部　科学部　外信部　ワシントン支局　科学部長　人事部長　仙台支社長（東日本大震災担当）　常務監事　顧問　群馬大学・慶應大学招聘講師　科学技術振興機構（JST）編集長　一橋大学キャリア支援室　日本記者クラブ特別企画委員など　現在・共同通信客員論説委員　JST編集アドバイザー　国家資格キャリアコンサルタント　日本科学技術ジャーナリスト会議副会長など

昭和64年、1989年が明けた1月7日未明。午前5時すぎだった。科学部のソファで仮眠していた私は社会部デスクに叩き起こされた。「侍医長がパトカーに先導されて自宅を出た。総員呼び出しだ」。昭和最後の、平成最初の、怒濤（どとう）の一日の始まりだった。

◆忘れられない長い一日

共同通信の編集局は間もなく騒然となった。絶え間なく流れる参考・編集情報。皇太子ご一家のほか、皇族の方々が吹上御所に入った。竹下登首相も自宅を出た。社内の誰もが「その時」が近いことを悟った。

用意していた膨大な予定稿を取り出しチェックを始めていた頃だ。午前7時46分だった。「天皇陛下、午前6時33分崩御」。公表に先駆けて整理本部が全国の新聞、放送各社に「フラッシュ」を打った。その約10分後に藤森昭一宮内庁長官が、さらにその約1時間後、高木顕侍医長が記者会見し、昭和天皇陛下（以下陛下）のご逝去と真の病名を初めて公表した。享年87。激動の昭和の時代を生き抜いた一生だった。

その日から1年3カ月半ほどさかのぼる。昭和62年9月22日、陛下は腸の通過障害を取り除くためのバイパス手術を受けていた。高木侍医長らは会見で「慢性膵炎の疑い」などと述べていた。

「戦前は現人神とされ、戦中、戦後の歴史を生きた昭和天皇を一人の人間としてその病状を徹底して追うんだ。ほかには何もしなくていい」。当時の西俣総平科学部長からそう言われた。その日から私の474日が始まった。書き貯めた取材ノートは20冊を超えた。

当時、宮内庁病院に厳重に保存された〝カルテ〟があった。横にケイ線が入ったA4の白い用紙。だが一人の患者としては異常に多い約50枚もあり、表紙には「聖上」の2文字。「術式＝開腹による十二指腸腸吻合（ふん）術」「手術時間2時間35分、麻酔時間4時間30分」と続く。住所と病名は書かれていなかった。

記者会見では手術は無事終わったと強調された。だが、肺の両側には胸水貯溜（りゅう）、左下肺の軽い無気肺の症状。実は事態は深刻だった。執刀医は「命が縮む思いだった」と述懐している。

◆沖縄への強い思いだったか

その後の治療は点滴と輸血を中心とした異例ずくめだった。陛下は持ち前の内臓、特に心臓の強さで病魔と闘い続けた。宮内庁からは連日「バイタルサイン」と呼ばれる血圧、脈拍などの基礎データは公表された。しかし詳しい病状は「菊のカーテン」で隠されていた。

陛下ご自身はその後の闘病の結果、公務にも部分復帰された。年が明けた昭和63年1月2日には長和殿のベランダに姿を見せている。

その年の8月15日。私は武道館にいた。「全国戦没者追悼式」に出席される陛下の姿を自分の目で確かめるためだ。足取りは少しおぼつかなかった。しかし「戦禍に倒れた数多くの人々やその遺族を思い、今もなお胸が痛みます」。そう述べられた「お言葉」はしっかりとしていた。思いもかけず胸が熱くなった。

しかし陛下はその翌月の9月19日に大量の吐血をされ、重体と報じられた。その危機も乗り越えて吹上御所2階の病室に戻った10月のある

日。つぶやいた一言に周囲にいた侍医や侍従はドキリとしたという。「もうだめか」。病魔と闘い続けた日々にあって「痛い」「喉が渇いた」などと一切口にされなかった陛下。「ご自分の病気のことではなく、切望しながら叶わなかった沖縄訪問のことだった」。ある侍医は私にそう証言している。

◆凛としたもう一つの闘病

大量の吐血から4日たった9月23日。陛下の病状データは厳しい数値を示し、政府筋からは「陛下危篤」の情報が乱れ飛んだ。

この日の夕刊で新聞各社は「天皇陛下重体」と大きく報じた。朝日新聞は同じ一面に「すい臓病変部はがん」との記事を載せた。



「天皇陛下ご逝去」の号外を争って手にする通勤客（1989年1月7日午前8時50分／大阪・梅田の地下街／共同通信社提供）

編集局デスクでは激しい議論が続いた。その結果「陛下のご病気は十二指腸から発生した腺がん」とする記事が配信された。「一社により事実上紙面告知され、がん報道を控える理由はなくなった」との判断だった。

バイパス手術の際に通過障害を起こしていた十二指腸壁から採取された数ミリの病変組織は2、3ミクロンに細断され、23個の標本が作られている。内視鏡診断からも原疾患は十二指腸下部末端から空腸に6センにわたる浮腫があり、悪性腫瘍であることを示していた。進行度が遅い高分化型に近い型のがんだった。

陛下の病名診断は、病理学が専門の森亘東大学長や医学部病理学教室の浦野順文教授が極秘の検討会で決めた。その翌日、高木侍医長は「組織病変に細胞の異形成は認められなかった」と発言している。

浦野教授は押しかける取材記者から逃れるように東大の教授室から姿を消したが、複雑な思いだった。「真実は必ず明らかにされなければならない。後日であってもだ」。そう語った当時、自身肝臓がんに侵され、告知されている。

陛下の病状は回復傾向にあった昭和63年1月の13日。浦野教授の症状は悪化していた。とても講義ができる体調ではなかったが、病理検査の貢献でいただいた銀杯で水を飲み、自宅を出た。そして東大医学部で最後の講義に臨んだ。「病理学は生と死を扱う。病気と回復を繰り返して次第に死に至る」。50人を超す学生を前に凛とした姿でそう語り、夫人に付き添われて退席した。

東大を出た後、皇居半蔵門に近いホテルロビーで夫人とクリームソーダを美味しそうに飲んだ。病院に戻りその2日後未明、静かに息を引き取った。55歳の若さ。陛下に約1年先立つ旅立ちだった。

◆公表された真の病名

冒頭に記した昭和64年1月7日の朝に戻る。

午前9時20分から記者会見に臨んだ高木侍医長はモーニングに黒ネクタイ姿で喪章を着けていた。「諸般の事由から慢性膵炎と公表してきましたが、最終診断は十二指腸乳頭部周囲腫瘍、腺がんとします」。その口調は穏やかだった。

陛下のご病状を追った日々。侍医長の公表内容を聞いて全身から力が抜けたことをはっきり覚えている。時代は平成に変わった。車を手配して皇居前広場脇の大通りを通った。静かに頭を下げる何人かの市民はいたが、長い昭和の時代が変わったとは思えない静けさだった。

その日、共同通信社から膨大な原稿が流れた。科学部からは1ジャー分の企画記事「陛下のカルテ」、2ジャー分の「昭和天皇の闘病日誌・全記録」が配信された。限られた公表内容の陰で陛下がどのような病床の日々を送られたのか。乏しい情報のすき間を埋めた「記録」だったと自負している。

昭和天皇という患者に対する医療は「天皇だったからやったこと」「やらなかったこと」。その両方だった。連日の出血、下血に対する大量輸血と点滴による対症療法は黄疸や各臓器の機能低下を抑えた。全身に栄養と酸素を運ぶ血液を交換する徹底した輸血。それは一般人ではとても望めない特殊な、超の付く濃厚医療だった。

時代は昭和、平成から令和へと変わっている。当時の関係者の多くが世を去った。こちらも歳を重ねた。自粛・自制の半面、過剰でもあった昭和天皇のご病状報道。「今の時代だったら、いろいろどうだっただろう」

自分が育った昭和の時代の感慨とともにそんな思いがよぎる。

私が会ったあの人

元首相・鳩山由紀夫さん
らしくない宇宙人、今ならば

関口　裕士（北海道新聞社）

筆者は、いわゆる政治記者の経験がなく選挙取材は数えるほどしかしていないが、地元選出の衆院議員として室蘭勤務時代に担当した鳩山由紀夫さんの選挙のいくつかの場面が印象に残っている。

２００５年の総選挙。室蘭市内で行った出陣式で、鳩山さんの第一声は「今日はとってもうれしいことがある」で始まった。室蘭の病院に入院していた後援会の寺山好子さんが、病をおして駆けつけてくれたことを紹介したのだ。

東京出身の寺山さんは結婚後、室蘭に移った。幼いころ、自宅近くの護国寺で遊んだ1歳年下の男の子が鳩山さんだった。鳩山さんが衆院選出馬のため室蘭に拠点を移すと、実の弟のようにいとおしく思い、夫婦で後援会に入った。寺山さんは２００３年に悪性リンパ腫を発病後も、手術や抗がん剤の副作用に耐えながら応援した。

同じ選挙の最終盤で寺山さんはもう一度外出許可を取り、市内での街頭演説に出かけた。彼女を見つけて走り寄る鳩山さん。「やせたんじゃない、疲れてない？」と相手の頬を両手でさすったのは鳩山さんではなく寺山さんだった。

翌年、寺山さんは亡くなった。3年後、夫の聰さんは遺影にうれしい報告をすることになる。「鳩山さん、首相になったんだよ」

■ぶち上げた理想の目標

北海道選出議員で初の首相になった鳩山さん。政権交代直前には米軍普天間飛行場の移設先について「最低でも県外」と発言し、首相就任直後の国連総会では日本の温室効果ガス排出量を２０２０年に１９９０年と比べて25％削減するという高い目標をぶち上げた。

「政治はそんなに甘いものではない」「お花畑だ」…。そう批判された。「宇宙人」と呼ばれ、米紙には「ルーピー（間抜け）」とまで書かれた。



（２０２１年６月21日／東京・永田町／北海道新聞社提供）

もともと室蘭での街頭演説でも理想論を語っていた。派手な柄のシャツに赤いベルトといったいでたちで地方都市の室蘭を回る鳩山さんは「宇宙人」という形容がふさわしかった。

■裏も表もない、そのまま

そんな鳩山さんに今年6月、久しぶりにインタビューした。「最低でも県外」という言葉のその後をどうみるか聞くためだった。

「政権交代前夜の民主党への期待感が盛り上がる中、『何とか最低でも県外にしてほしい』という声をたくさんの方から聞いたのです」。だから「最低でも県外」と言ったという。裏も表もない。そのままだ。民主党の幹部にさえ十分な根回しもせず「フライングのような形で」言葉を発したため「自らの首を絞める」ことになった。官僚も「面従腹背だった」とぼやいた。確かに政治とはそんなに甘いものではないのだろう。結局、県外移設を諦め、移設先を名護市辺野古とする従来案に回帰。一連の迷走に加え、政治とカネの問題もあり退陣することになった。

インタビューで聞いてみた。鳩山さんって政治家には向いてなかったのではないですか――。

「普通の政治家とは全く違うから、向いてないといえば向いてなかったと言えますね。ただ、政治家も官僚も経済人も学校の先生も、みんなそこに向いている人がその世界に入って仕事をして、今のこんな日本になってしまった。『らしくない人間』が入って変えないと、この国はますますおかしくなってしまうと思うのです」

宇宙人のそんな言葉は、確かにそうだよなあと思う。

（せきぐち・ゆうじ▼２０００年入社　現在　編集局編集委員）

次号は関口さんが東京支社在勤時代の取材仲間だった東京新聞の坂田奈央さんにバトンが渡ります。

試写室（10.16）

水俣曼荼羅



15年の記録　壮大な叙事詩

「水俣曼荼羅」のタイトルは何を意味するのか。映画「ゆきゆきて、神軍」（１９８７年）で知られ、世界的なドキュメンタリスト・原一男監督は、メチル水銀中毒とされる日本四大公害病の一つ「水俣病」をどう描くのか。ワクワクしながら試写会場（10階ホール）に入った。

３部作のドキュメンタリーで６時間12分の力作。長時間に耐えられるだろうか。自宅からスポンジ製の座布団を持参したが、最初からスクリーンにくぎ付けとなった。



試写会後あいさつをする原監督

２００４年秋、最高裁でチッソ水俣病関西訴訟の判決。映画は「国と熊本県にも水俣病の責任がある」と確定した日から始まる。その後も水俣の闘いは続く。今も約２０００人が患者認定を申請中で、裁判も８件が係争中という。

関西訴訟判決後の原告の姿を丁寧に追いながら「医学像」を問う。そして水俣の現地の暮らし、数々の訴訟が登場。勝訴判決でも救済枠に収まらない。認定者も未認定者も苦難との闘いが続く。90歳になっても権力と闘う男性。認定基準で「脳の中枢神経説」を実証した熊本大学医学部教授のシーンも見逃せない。

一方、胎児性水俣病患者のかなわぬ恋のストーリー、患者の結婚。そして「初夜」のエピソード等々。水俣は喜びや笑いに溢れた「世界」でもある。15年の記録はさながら密教の曼荼羅のよう。水俣で生きる人々の人生をあらわした壮大な叙事詩といえるのかもしれない。

「水俣を忘れてはいけない」「感情のディテールを描いた」と強調する原監督。試写会後「タブーから描き切れないシーンもあった。映画は体感。面白いと思うかどうかである」と語った。「人権軽視」に光をあてながら、権力の「生の姿」も丹念に追い求めた傑作といえる。

東京新聞出身　長竹　孝夫

11月27日から「渋谷シアター・イメージフォーラム」ほか全国順次公開
配給 疾走プロダクション ©疾走プロダクション

マイBOOKマイPR

『世界の知性が語る「特別な日本」』

会田　弘継（共同通信出身）

近代日本の記憶をたどって

近代日本を論じる長編エッセーです。インタビュー集ではありません。世界の政治家や知識人との対話で浮かび上がった彼らの日本観と、著者のさまざまな体験や記憶を重ね合わせながら、近代日本を考えてみました。といって、小難しいことを述べているわけではないですから、気軽に手にとってみてください。今日の日本の停滞は戦後との向き合い方に問題があるのではないでしょうか。そんなことも考えていただけたらと思っています。



新潮社
792円

『歌から見える世界　心の歌よ！Ⅲ』

伊藤　千尋（朝日新聞出身）

民族固有の魂の歌に迫る

映画「卒業」で流れた「サウンド・オブ・サイレンス」は、ケネディ暗殺事件の副産物でした。「コーヒー・ルンバ」は、アラブのお坊さんとは無関係な南米ベネズエラの歌です。世界の歌を現地調査すると、思いがけない発見があります。

「ソルヴェイグの歌」を訪ねて北欧ノルウェーへ。「鳥の歌」のカザルスを追ってカリブ海へ。コロナ禍で旅ができない時期だからこそ、紙上で試みた地球規模の歌の探検。私たちになじみ深い歌の成立事情と風土、歴史的背景を探り、民族固有の「魂の歌」の内実に迫ります。



新日本出版社
1,760円

『ジャーナリズムの倫理』

山田　健太（日本新聞協会出身、専修大学）

言論法の体系書　理論と実務から

全面改訂した『法とジャーナリズム第４版』と本書は、ジャーナリズムを支える法制度と倫理の両側面を、理論と実務の双方の視点から網羅的に扱った〈言論法〉の体系書をめざしました。いま多くの国で民主主義が揺らいでいます。その象徴例が表現の自由の縮減であり、ジャーナリズム活動の衰退です。そうしたなか、本書が民主主義の維持発展装置でもあるジャーナリズムが元気になることに、いくばくかの貢献ができることを願っています。



勁草書房
2,750円

「写真回廊」余話

●ある犬の死

10月上旬のある朝、その犬は14年の生涯を静かに閉じた。

腹水に悩まされていた。肝臓がんとの闘いも３年半におよんだ。

10年前までは福島県・中通りの村に住んでいた。そして、あの福島第一原発の事故…。

避難を余儀なくされた飼い主がやむなく手放したあと、しばらく山野をさまよっていた。現地に入ったボランティアが保護した時はガリガリに痩せて、体中にダニがいたという。やがて関東の小さな町で里親が見つかった。



たくさんの花束に包まれて永眠（飼い主が撮影）

私はこの犬のことを「写真回廊」（４月号）に書いた。

亡くなった当日は弔問客が次々に来て、一時は玄関前に列ができたという。贈られた花束が家中にあふれた。なぜこんなにたくさんの人が？　驚いたのは飼い主だった。

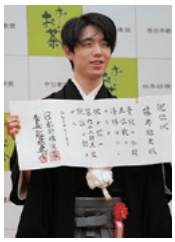
この犬の来歴を知っていた近隣の人たちは、路上ですれ違うたびに「がんばれ！」と声をかけ続けた。それは被災地・福島にも届くようにとの思いが込められていたはずだ。

フジテレビ出身　熱田　充克

情報発信

クラブ施設では会員による各種の会合が行われています。

■お～いお茶杯第62期王位戦 藤井聡太王位 就位式



日本将棋連盟提供

将棋の王位戦七番勝負（新聞三社連合主催）で初防衛を決めた藤井聡太王位（叡王、棋聖と合わせ三冠）の就位式が開催された。藤井王位は「序盤に課題が見つかった。この課題を見つめ直し前に進んで行けたら」と語った。（10.28　10階ホール）

■会議報告

●第427回会報委員会（10.4　大会議室）

11月号の編集について協議した。

出席　乾委員長、古沢、曽我部、諏訪、鴨下、勝田、本橋、倉澤、真田、山田の各委員。

●第521回企画委員会

（10.12　10階ホール＆オンライン）

今後のゲスト候補について意見交換した。

出席　藤井委員長、坪井、黒沢、佐藤、澤田、橋本、猪熊、大内、小竹、中山、辻本、佐々木、森田、杉田、井上、五味、名取、伊藤、竹田、出川、川戸、播摩、小栗、名村、平井、福田、保高、浅井、宮内の各委員。

●第530回会員資格委員会（書面）

11月１日付入退会を審議、理事会に答申した。

会報委員から

ワクチン「情報統制」に目をこらす

最も権威ある医学雑誌の一つ「ニューイングランド・ジャーナル・オブ・メディシン（ＮＥＪＭ）」の元編集長マーシャ・エンジェルが書いた『ビッグ・ファーマ　製薬会社の真実』（２００５年）は医学論文が製薬会社によっていかに歪められてきたかを白日の下にさらした。製薬会社は薬を売るために「病気を作る」という衝撃の内容である。

ユーチューブは９月29日、コロナやワクチンに関する「誤情報」を削除するとの方針を明らかにした。現在治験が行われているイベルメクチンを「推奨」する動画も削除されるという。「誤情報」の削除は他のＳＮＳでも進んでいる。接種が進むファイザーやモデルナのワクチンはこれまで人類に使われたことのない「核酸ワクチン」である。「安全性」を巡って医学的にも議論が続いている。ｍＲＮＡがつくり出す大量の抗原タンパクの体内での挙動や脂質のコーティングに使われるポリエチレングリコール（ＰＥＧ）の人体への影響、さらにはワクチンを打つことによって感染しやすくなる抗体依存性免疫増強の有無などである。事実ワクチン接種により心筋炎や心筋症が若い男性を中心に発生しており、スウェーデンなどは30歳以下へのモデルナワクチンの接種を停止した。

国立感染症研究所のＯＢの一人は、こうした情報統制がＮＥＪＭにも及んでいると指摘する。ファイザー製ワクチンの「有効性」と「安全性」を示すデータは同誌に２本の論文として掲載されている。９月13日の最新論文を見てみると執筆者32人のうち12人はファイザーの研究者である。ある専門家は「到底論文の公正性が保たれているとは思えない」と批判する。ワクチンは健康な多数の老若男女に接種する。安易に「誤情報」のレッテルを貼って、「正しいネガティブ情報」まで闇に葬られることがないよう、メディアは今こそ目を光らせなければならないだろう。

日本テレビ出身　倉澤　治雄

レストラン＊価格は全て税込みです

予約電話 和食 3503-2723 洋食 3503-2766・2731

和食 霜月懐石（11/30まで）

前菜：子持ち昆布、鰆南蛮漬け、わかさぎ磯辺揚げなど お椀：からすみ真薯など 造り：鮪、紅葉鯛、花烏賊 焼物：甘鯛丹波焼き、茄子田楽焼きなど 煮物：菊花蕪菁、舞茸、蟹餡など 揚物：ふぐ唐揚げ、青唐など 食事：名残松茸ご飯 水菓子：旬の果物（5,500円）※要予約

（板長：内海圭史）

洋食 季節のおすすめコース（11/30まで）

スズキのカルパッチョ サラダ仕立て、かぼちゃのクリームスープ、煮込みハンバーグ デミグラスソース温野菜添え、ミルフィーユとバニラアイス、コーヒーまたは紅茶、パンまたはライス（4,400円）。ランチ、ディナー（土曜日はランチのみ9階レストラン）ともにご利用いただけます。

（シェフ：佐藤和治）

貸室の空き状況 ウェブで確認できます

クラブの貸室（9階小・大会議室、会見場、10階ホール）の空き状況をクラブのウェブサイトで確認できます。トップページ上部にある「施設利用案内」から「空室確認」を選ぶと、各部屋の空き状況が表示されます。カレンダーのアイコンで日付を選択し、希望日をご確認ください。1年先まで空き状況を見ることができます。

利用申し込みはフロアマネジャーまでお電話ください（03-3503-2724）。またはラウンジの受付で承ります。

HP更新情報 https://www.jnpc.or.jp/

■音声アーカイブ 重要会見の音声録音

●盧泰愚 元韓国大統領 会見記録公開中です



10月26日に死去した韓国の盧泰愚・元大統領は1990年5月26日に、当クラブで会見しています。このときの会見の音声、文字記録などを公開しています。



韓国民主化後、初の大統領選で当選した盧泰愚大統領（当時）の訪日には、極左から極右、さらに北朝鮮も反対を表明しており、クラブの歴史に残る厳重な警備体制が敷かれました。

会場入場の際は金属探知機（写真）でのチェックがあったほか、プレスセンタービル周辺は機動隊三個中隊を含む400人が配備され、ビル内にも200人の警備陣が配置されました。事前点検は、ビル各階の天井裏の排気口まで及び、「確認済み」のシールが各所に貼られたそうです（「ウェブ50年史」から）。

今後のクラブの対応について

営業時間をすべて通常通りに戻し、ラウンジ、レストランでは酒類の提供を再開しています。詳細は下記をご覧ください。

なお状況が変化しましたら、最新情報をウェブサイトのトップページに掲載しますので、ご確認ください。

■ラウンジ

午前10時～午後9時30分（土曜日は午後6時まで）

利用される際に新型コロナ感染対策として、引き続き入室簿の記入と手指消毒をお願いいたします。

■9階和食レストラン

午前11時30分～午後2時30分、午後5時～午後9時（ラストオーダー昼は午後2時、夜は午後8時、土曜日はランチのみ）

■10階アラスカ

午前11時30分～午後3時、午後5時～午後10時（ラストオーダー昼は午後2時、夜は午後9時、土曜日はお休み）

■貸室利用

平日：午前10時～午後9時、土曜日：午前10時～午後5時（9階）、午前10時～午後4時30分（10階）

詳細についてはフロアマネジャーまでお問い合わせください（電話03-3503-2724）。

■記者会見

11月1日から定員を設けず会見を開催しています。Zoomによるライブ配信は引き続き行います。申し込み時に「会場」か「ウェブ」のどちらで参加するかを選択してください。

＜法人代表変更＞

日本国際放送 高尾潤 代表取締役社長
（旧 城本勝氏）

今後の行事予定（11/2現在）

15㊊	15：00～16：00 10階ホール 「子どもの自殺」 伊藤次郎 NPO法人OVA代表理事、小林純子 NPO法人チャイルドライン支援センター代表理事
16㊋	15：00～16：30 会見場 「脱炭素社会」③ 江守正多 国立環境研究所地球システム領域副領域長
24㊌	14：00～15：30 10階ホール 「ジェンダーと教育・研究」① 佐々木成江 名古屋大学大学院准教授

クラブの電話 ダイヤルイン

●和食レストラン（9階）……☎3503-2723
●洋食レストラン（10階）……☎3503-2766
●貸室予約、宴会打ち合わせ…☎3503-2724
●受 付……☎3503-2721
●会員事務……☎3503-2727
●経 理……☎3503-2728
●クラブ行事への申し込み…☎3503-2722
●会見申し込みアドレス…kaiken@jnpc.or.jp

会員現況 ●法人会員：127社 ●基本会員：720人 ●個人会員：1,138人 ●法人・個人賛助会員：55社・120人 ●特別賛助会員：96人 ●名誉・功労会員：12人 ●学生会員：66人 計：182社・2,152人

会報委員会
委員長＝乾 正人
委 員＝及川 純一 勝田 洋人 鴨下 ひろみ 倉澤 治雄 真田 正明 諏訪 敬明 曽我部 桂 古沢 由紀子 本橋 春紀 山田 道子
（事務局：本庄五月 杉本翔一）
☎03-3503-2754 FAX 03-3503-7271

写真回廊

撮影：千葉（ちば） 一成（かずしげ）（東京新聞写真部部次長）



築地市場跡地に並ぶ東京五輪・パラリンピックで使用された大会関係車両＝10月4日、東京都中央区

闘い終えて日は暮れず

それは、「アンダー・コントロール」から始まった。

被災地の取材が多かった私は、小学生だった１９６４年のワクワクした気持ちを思い出しながらも、オリンピック東京開催をもろ手をあげて歓迎する気分にはなれなかった。それでも「多様性と調和」という大会ビジョンに力を得て、あえていえば東京で開かれる2度目のパラリンピックに期待する気持ちもあった。

そして、新型コロナ。

聖火が日本に到着するのを待ってからの開催延期の発表、その後の緊急事態宣言。どう考えても、五輪・パラリンピックの存在が判断に大きな影響を与えたとしか思えなかった。

ボランティアのドライバーたちが大会関係者を乗せて会場周辺を走りまわっていた専用の車は、３０００台近く。いま、中古車市場で人気だという。

ＮＨＫのパラリンピック放送に登場していた障がいあるリポーターの教育係とサポート役をしていた私は、それなりに関わった。活躍するアスリートたち、大会関係者、さまざまな場で重要な役割を担っていた多くのボランティアたち。もっと伝えるべきことや、語られるべきことがあったと思う。課題も含めて、社会の多様な面が見えていた舞台であった。であるのに、レガシーを語るべきときに、首相退陣、総裁選、総選挙へ、と政局一辺倒となってしまった。夏の日々のあれはなんだったのだろう、とふと思う。

役目が終わった車をこうして大量に目にすると、それでもあれは確かにあったことだったのだと思える。中古車市場で人気の理由は、あまり乗られていないことで新車に近く、値段がリーズナブルで、大会とは直接関係ない理由も大きいと聞く。それなりに落ち着く場所に落ち着くのだろう。

みな役割は果たした。

ただ、この不完全燃焼の感覚はどうしてもぬぐえない。

（迫田　朋子）